

日本を見つめ直し、楽しく生活、仕事しましょ、シリーズ。

欧米列強国の世界植民地化が飽和状態となる時期に、当時世界最強国のイギリスに伍する軍事力を成長させたドイツの台頭があり、列強国間の争いが激しくなります。

大正3年(1914年)、イギリス・フランス・ロシアを中心とした連合国とドイツ・オーストリアを中心とした同盟国との間で第一次世界大戦が始まります。しかし、途中でロシア革命が勃発し内戦が始まり、革命政府がドイツと講和し戦線を離脱、イギリスはロシア革命軍とドイツを牽制するために、日本やアメリカなどにシベリア出兵を要請します。

当時、シベリアにはポーランド政治犯家族や戦争難民がいましたが、ロシアが内戦の混乱となり、祖国に帰れず、餓死者・凍死者・病死者が続出、ウラジオストツクのポーランド人により救済委員会が組織され、一番生命の危険にさらされている孤児だけでもシベリア脱出支援を欧米諸国に依頼しましたが、ことごとく拒否されていました。革命政府との紛争を避けたいことと、革命軍下の凶暴な便衣兵パルチザンが跋扈(ばっこ)しており、一般的な軍事作戦と異なり苛酷な環境で子供を救出するのは危険だったからです。

最後に頼ったのは日本政府でした。当時の原内閣は即座に了解し、要請からわずか17日後に日本赤十字社が窓口となる救済の方針が決定され、シベリア出兵中の陸軍が直ちに孤児の探索、收容をはじめます。

1920年大正9年から11年まで2度の救済計画で9回にわたり急を要する765名の孤児が来日しました。第1回は広尾福田会、2回目は大阪市立病院看護婦寮に收容されました。精神的に不安定にならないように10名に一人ポーランド人の大人を付添につける手厚い配慮がなされ、栄養失調の回復、チフスなどの疾病対策がなされました。また多くの国民の関心、同情が集まり、さまざまな差し入れ、多くの寄付金が集まりました。勉強や様々な慰安がありました。動物園が一番楽しかったようです。祖国に帰る日、多くの孤児が涙し、君が代を歌って別れを惜しみました。(旅の途中、日本に帰りたくて脱走した子供もいたようです)

時は流れ1930年、帰国した孤児のイエジ・ストシャウコフスキという青年が、シベリア帰国孤児の親睦と、相互補助、日本との友好を目的とした極東青年会を設立、日本大使館との交流が始まりました。さらに時は流れ1939年、ドイツとソビエトは独ソ不可侵条約締結時において、ポーランド・バルト諸国分割・再編の密約を締結、両国はほぼ同時(9/1、9/17)にポーランド進攻を開始、第二次世界大戦がはじまります。

※秘密協定の存在をソビエトは否定していましたが、1988年ゴルバチョフ書記長が認めました。

ドイツの侵攻、ソビエトの謀略は苛酷なもので、知識層・指導層はアウシュビッツ等收容所に送られ殺され、一般市民は戦時奴隷労働のためにドイツに送られました。

イエジ氏は新たに発生する孤児の保護の他、極東青年会員を招集し地下組織をつくり抵抗運動をはじめます。

孤児院に武器を隠し拠点としていましたが、ナチス秘密警察の搜索を数度受けます。この際、急報を受けた日本大使館の書記官が「この孤児達はわれわれが面倒をみており身元を保証する。お引き取り願いたい」と守ったり、「(日本が保護している証拠に)この人達になにか日本の歌を聴かせてやってくれ」と呼びかけ、イエジ氏達全員で君が代や愛国行進曲を歌うと、失礼しましたと言って帰っていったという逸話が残されています。

日本は世界から見捨てられたシベリア救出からはじまり、第二次世界大戦でもポーランド孤児達を救う努力をしました。なにかと批判されるシベリア出兵ですが、このことがなければポーランド孤児達が救われることはありませんでした。



ウラジオストツク出港時



東京広尾で



平成14年皇后さまと孤児の方



来日したイエジ氏(左)